

P T N)に相当すると考えられる。

われわれはネコにおいても大脳脚橋被蓋核が同側の視床下核に直接投射することをHRP法とトリチウムアミノ酸のオートラジオグラフィーによって確かめているので、サルは視床下核にHRPを注入したときに標識される結合腕周囲の神経細胞も、単に視床下核を通過する軸索だけを送るのではなくて、視床下核にシナプス終末をもつ軸索を送る考える。

ニホンザルの胃虫の生活史に関する研究

町田 昌昭(科博・動物)

ニホンザルにはいわゆる胃虫とよばれる線虫、*Streptopharagus pigmentatus*の寄生が知られている。本虫はサルは胃や小腸上部に寄生し、多数寄生すれば重篤な症状をひき起こす。これまでの幸島の調査やサルへの感染実験により、糞食性甲虫センチコガネ、クロマルエンマコガネ、コブマルエンマコガネが胃虫の中間宿主になりうることを確認した(詳細はBull. Nat. Sci. Mus. 誌4巻1号)。本年度は宮崎大構内で採集した未感染の数種昆虫類に幸島のサル由来の胃虫卵を与え、昆虫内における胃虫幼虫の発育課程を追求した。その結果コブマルエンマコガネとオオセンチコガネの2種の体腔内から、虫卵投与後約40日で感染型幼虫が回収されたが、モリチャバネゴキブリなどでは感染が成立しなかった。回収された感染型幼虫は、幸島の糞食性甲虫からえられる胃虫のそれと形態的に全く同じであった。さらに宮崎大でニホンザルおよびカニクイザル、霊長研でヤクザルを用い、幸島の糞食性甲虫から採取した胃虫の感染型幼虫を実験的に経口投与した。その結果宮崎大で幼虫500匹を投与し、投与後63日で殺処分したニホンザル1頭の胃より胃虫の未熟雌成虫2匹、同じく幼虫250匹を投与し、投与後56日で殺処分したニホンザル1頭の胃より未熟雌成虫1匹を回収した。サルへの感染実験は今回を含めて、少数の未熟成虫が回収されるのみで、完全成虫は1匹も回収されていない。幸島のサルにはきわめて普通にみられる胃虫が、どうして実験的にサルに感染し難いのか、今のところ判然としない。

霊長類のヒトA型肝炎ウイルスに対する感受性について

吉沢 浩司、伊藤 行夫
津田 文男

(都立臨床医学研)

研究目的:

ヒトA型肝炎ウイルスに対する感受性動物を血清疫学的方法により見出し、このウイルスの新しい感染実験系を樹立することを研究目的とした。

研究の方法:

「霊長研共同利用研究」で、使用可能なサル類28種類計283頭より血清を採取し、その血清中のヒトA型肝炎ウイルスに対する抗体(抗H A抗体)をRIA法及び免疫電子顕微鏡法により検出した。結果および考察:

28種類のサル類のうち、今回はじめて抗H A抗体保有が確認された9種類のサル類を含めて15種類の血清中に抗H A抗体を検出し得た。血清中の抗H A抗体陽性を示したサル類は、過去にヒトA型肝炎ウイルスに感染した既往があることを示す。即ち、これらのサル類はヒトA型肝炎ウイルスに対する感受性を有する動物であることを示している。このことから感染実験系樹立への足がかりと共に、疫学的見地からも重要と思われる所見を得ることができた。

ニホンザルの選択行動に及ぼす時間要因の効果

矢口 敬(北大・文)
浅野 俊夫(京大・霊長研)

即座の報酬はたとえ少量であっても、遅延する多量の報酬よりも、しばしば強く好まれることがある。“衝動的”と呼ばれるこのような選択行為を規定するものとして、本研究は特に時間要因に着目し、ニホンザルにおいてその効果を吟味した。

方法 オスのニホンザル3頭について、オペラント選択法(並立連鎖スケジュール)を活用して、次のような2つの選択肢間の相対的選択比を測定した。

選択肢A — 常に、遅延50秒で大豆一粒(一定遅延条件)。

選択肢B — 遅延10秒か90秒で(半々の確率)